



「おまけコラム」
草文明の

暮らしかた 6

亜熱帯のようなこの国。夏は長期に休むこと、頭を休め、自然に親しむことが大事だと思います。都会でもスーツなど脱ぎ捨てて、素足で仕事する。灼熱コンクリートを剥がし、木々を植えていく。それが当たり前になる日も、いつかきつとやって来るでしょう。

草と海と馬の物語

その六

矢谷左知子

先の選挙では、馬と共に選挙活動をしている安富歩さんを知り、ほんとうに、ああ、ついにこういうときが来たのだな、と感慨深く思いました。なぜ馬なのか、そこには使途目的などない、これは客寄せとかでももちろんない、でもだからこそ馬。馬と共に居ることの本質、そこを視ている人が居る、と。

この連載でも毎回書いていますように、2年前突然に自分に宮古馬の問題が降って来てなぜか先頭でやることとなり、当初慣れない馬のことでもあり、どう動いたらいいのだろうと戸惑いましたが、すぐに、馬たちからその本質が伝わってきているのが解りました。

どう動いていくのか、その真髓の部分、それは言葉にし難いところですが、あえてしてみると、すべてのボーダーを外し、対立の外に常に身を置くということ、これは、この問題だけではない、すべてに通ずるところ、そこを視て、と馬から言われているように思い、馬を道標として、一步一步道程を進めてきています。

馬からは胸がいっぱいになるような、奥深い底の部分での心の組み換えを授けてもらったように思うのですが、まさにその部分を安富さんが表現されていたように思い、ようやく馬に対して同じところを視ている、想っている、しかも言葉と行動に移している人が、このような形で登場してくれたということに感無量でした。

これはこの時代、同時多発の現象でもあります。全国で、そして、全世界で、馬たちが立ち上がってきました。あちこちで馬という存在に人は気づき始めました。やっと私たちが馬たちの領域に追いついてきたのではない、長い長い間、馬たちは人の覚醒を待っていた、それがようやく萌芽してきた。すでに手遅れになってきているこの世界、その中で、次の意識の目覚めの先頭を馬が走って

来ていて、人はその後を馬に導かれて世界を立て直していく、比喩ではなく、リアルにそんな時代を迎えているように思います。

と、相変わらずわかったようなわからない、馬の説明、いつまでたっても言葉が足りませんが、またの機会にも書きます*

さて、今回は、この数年の私の主題である「草と獣」のことについてです。

【「草と獣」という主題】

今号のインタビューでは、岡山の猟師のリュウタロウくんが取り上げられていますので、今回は私も彼との間で今始まっていることも併せて書いてみたいと思います。盟友リュウタロウくんとは、この数年、小さくとも壮大なテーマでのアートワークが始まっています。

彼との深い交流のなかから、この「草と獣」のテーマが降りてきました。

龍太郎くんは自分で仕留めた鹿たちを、自ら解体、肉は食用に、骨は道具に、皮はドラムに、美しく次の形に変容させる人です。

この過程、人は何万年の間やってきたことですが、彼の仕事をみていると、生き物が次の形となる、その間に介在する人の「質」によって、出来上がる物というのはこれほどまでに違ってくるのか、ということが明らかになるのです。

そこは、これまで私の野生の草からのものづくりでも、最も研いでおこうとする意識の部分でもあります。

人が作る以上、どうしてもそこにはその人が出ます。その時に、できれば自然が行く方向に身を沿わせ、草が成りたいように次のかたちに成る、そこにそっと寄り添いたいと願い、そうしたものづくりをしてきました。そこに人の想いや念などは籠らないように。ただ風がそよぐように。

リュウタロウくんの創ったドラムや道具を

初めて見た時に、同じところを見ている人だ、と解りました。

ある時、彼がドラムを作る道具としての鹿の皮でできた糸を見せてくれました。

それはまるで、私が草から創った糸と見分けがつかない。

それぞれが創った鹿と草の糸を並べたとき、二人で軽く絶句しました。これらは同じものではないのか。

鹿から作られた糸、草から作られた糸、大きく違う成り立ちの両者が、私たち二人の身体

を通して次の形になったとき、そこには同じ「素」の姿が現れていました。

動物と植物、両者は実は同じ原質である。

草だけをしてきた私と、鹿猪の猟をしてきたリュウタロウくんの仕事があわさったことで、世界の秘匿がそこに姿を現した、その瞬間でした。

その時から「草と獣」という主題が私たちのなかで始まりました。

この主題を掲げた実験的な展示会は、今年も私のアトリエ「草舟 on Earth」で開催されました。

リュウタロウくん以外の参加者は、同じく前年も参加して下さった、「海獣の子供」の原作者でもある五十嵐大介さん、鹿のツノから繊細な植物を掘り出す橋本雅也さん。

この4人の世界観が合わさったそこに立ち上がってくるものに心躍ります。いよいよ動物と植物と人のほんとうの仕事が始まり、草文明の日々が深まる。その真っ只中に世界はあります。

矢谷 左知子

一般社団法人 EARTH BOOK 代表

<https://www.earth-book.com>

野生の草仕事「草舟 on Earth」主宰

<http://kusabune.blog.fc2.com/>

<http://kusabune.blog.fc2.com/>

クリックすると草舟へ→



←「草と獣」のチラシ。今後、全国、世界で巡回展をゆつくりと予定しています。